

# エンカウンター（ENCOUNTER）

## 第 87 号

平成 21 年 7 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### ヒルティ

#### 「眠られぬ夜のために 第一部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス）より（2）

2 月 17 日

ひとから受けた不正をいつまでも思い続けることはつねに有害であり、そのうえたいいは無益でもある。そういう考えをいそいで払いのけて、そのために元気を失わないようにするのが、一番良いことである。

本当に正直な人ならば、たいがい、自分がいつも不相応に高く評価されており、また当然受けるべきほどの苦しみを受けていないことを、ひそかに告白するに違いない。

2 月 26 日

人間のあらゆる性質の中で、最良のものは誠実である、この性質は、ほかのどんな性質の不足をも補うことができるが、この性質が欠けているとき、それをほかのもので補うわけには行かない。

ところが残念ながら、この性質は人間にはむしろまれで、かえって動物のほうにしばしば見られる。したがって、この大切な点で、人間は実は動物にまさっているわけではない。もし他のどんな点よりもこのことで人間がまさっているとすれば、すべての生物の段階的進化の説の成立を、私も承認するであろうに。...

3月3日

あなたが私につながっており、私の言葉があなたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、あたえられるであろう。(ヨハネ伝 15・7)

人生のどんな境遇においても、神の導きと助けとをかたく信じてことができ、ヨハネによる福音書 15 の 7 にいわれていることをしばしば実際に経験したならば、この地上で堪えなければならない最も苦しいこと、すなわち、憂いや恐れが全くひとりでに消えうせ、人生のあらゆる困難がこの信仰を深めるための単なる修練となるであろう。しかもこの修練はついには勝利をもってかざられるが、これこそ地上の最も生きいきとした幸福である。

3月4日

われわれは完全に健康でなければ、立派な仕事はできない、だから ならによりもまず、健康でなければならぬ、という見解を信じ込んではいけない。これは今日、多くの良い人々の迷信となっている。ひと昔前には、ある種の病弱を天才のしるしとみなし、頑丈な健康をかえって「凡庸」のせいだと考えたが、現代では、逆に肉体のことをあまりにも気にしすぎる。

病弱はすこしも善い事を行う妨げとはならない。これまでも偉大な仕事をなしとげたのはむしろ病弱者であった。それに、完全な健康をもっていると、必ずとはいわないが、精神的感受性の繊細を欠くようになることが実際少なくない。あなたが健康に恵まれているなら、神に感謝しなさい。たんに「健康を守るためにのみ生きる」という考え方は、教養ある人にふさわしくないものだと思うがよい。

3月7日

今のときを生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。(エペソ 5.16)

力の許すかぎり、中絶せずに有益な仕事をすることは、たえず神の近くにあることと並んで、およそ人生が与える一切のうちで、最も良い、最も心を満たしてくれるものである。しかも、一旦この原則を生活の中にしっかり取り入れたならば、過度な仕事や不必要なこと、あるいはあまりにもせっかちな仕事ぶりや神経質なやり方を早くから避けることができる。

ことに、使徒パウロが、時を生かして用いる(エペソ人への手紙 5の16)と言ったこと この箇所を聖書の新しい訳は、もっと字義通りにするために、時を利用しつくすという不幸な言葉に直してしまったが その言葉が、これまでもしばしば、信仰上の事柄に性急(せっかち)や焦燥を持ち込む原因となった。しかしそのような態度は、キリストによる人生解釈とは全く一致しない。むしろキリストはなにごとにも時間をかけ、それ自体よい事柄にもあせるということはなかった。(ヨハネによる福音書 7の3-9,11の6・7・9・10)

このような落ち着きのない活動欲は、むしろ特にユダヤ教的な要素であって、パウロを通してキリスト教に導き入れられたものである。だから、この使徒の手紙も、晩年のものになると、ずっと慰めの力に富み、霊的内容と深さの点において、それ以前の手紙にはるかにまさっている。これは、彼自身もついに神の導きによって、もともと彼の気質にはなかった平安を与えられたからであろう。今やわれわれにとっては、あらゆる教会の事業やキリスト教の宣伝活動よりも、キリストの真の精神をより多く身につけることの方がはるかに必要である。

3月13日

どんな幸福な生活にも数多く起こる試煉や心労を堪えがたい重荷だと考えるか、それとも自分の生活原則を実行し修練するために、神から授けられた機会だと見るかは、ものごとの感じ方として大きな相違である。そして結局、この感じ方次第ですべてが決まるのである。

この後の見方は、もちろん信仰があって初めてできることであり、またそれが信仰の最も明らかな利益の一つでもある。

#### 希望

十字架は重いが、ふしぎなことに、  
おまえがそれを担うやいなや、それがおまえを担ってくれる。  
はじめは闇夜だが、いくては真昼の明るさ。  
この道を進むものは「勇者」と呼ばれる。

おまえの力は小さくても  
おまえの帰依した主の力は偉大だ。  
おまえの星はくらい夜空に輝きわたり、  
今日は死に 明日はいのちによみがえる。

3月15日

主なる神、イスラエルの聖者はこう言われた。「あなた方は立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」。しかし、あなた方は、この事を好まなかった。

(イザヤ書 30・15)

主はあなたに恵みを施される日を待っていられる。だから、あなたはいたずらに心配をしたり、いろいろ将来の計画を立てたりして、そのために、最もよい仕事の時間を多くつぶすことは全くいらぬ。神を信じて、神の道を誠実に進もうと努めるならば、万事はひとりで、しかもあなたが予期するよりも、はるかにうまく運ぶのである。これによって人生は非常に楽になる。なぜなら、起こるかもしれない不幸に対する心配は、ぜひとも忍ばねばならない現実の不幸よりも、一層ひどくひとの力を消耗させるからである。実際の不幸は、しばしば外的な手段や努力によってうち勝つこともできるが、しかし心配は神への強い信頼によってしか徹底的にうち勝つことはできない。このような経験はだれでも持つことができる。…

あなたの憂いをすべて主にゆだねよ、

主はあなたに代わり配慮される。

あなたは家族のための憂いを  
われらの信ずる主にゆだねよ、  
あなたはいたずらに策を案じ考えるだけだ、  
しかし主には行く道と将来が開かれてある。  
主は心配をきらうが、あなたがささげる  
天に向かっての祈りはよろこんで聞き給う。  
あなたがやっと一つの策を立てる間に  
主は千もの策を持っていられる。…  
いたずらにあなたを苦しめるために  
苦難が与えられたのではない。  
信じなさい、まことの生命は  
悲しみの日に植えられることを

4月23日

そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。

(コリント前書 15・6)

ただ、聖霊があなたがたに下るとき、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。(使徒行伝 1・8)

すなわち、ヨハネのバプテスマの時から始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日に至るまで、始終わたしたちと行動を共にした人たちのうち、だれかひとりが、わたしたちに加わって主の復活の証人にならねばならない。(使徒行伝 1・22)

このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。(使徒行伝 2・32)

他に、使徒行伝の 4 の 2, 10, 20, 10 の 41・42、17 の 31, 32 があげられている。

キリスト教の聖職者や神学者に対しては、使徒たちがわれわれに残している規準をもってはかるがよい。彼らのうち、キリストの復活を信じえない者は(その他にどんなにすぐれた長所をもつかにかかわらず)、神の霊を宿しておらず、まだ彼ら自身の人間的な霊しか持っていないので、そのためにキリストの復活という事実につねに反抗するのである。同様に、この人間的な霊は、もともと、真実の神の信仰に対しても反抗せずにはいられないのであって、こうした神への信仰のほうが復活の信仰よりも容易なところか、むしろ困難なくらいである。なぜなら、復活したキリストの多くの人々が、しかも同時に、それを見ているのに、かつて神を見た者は居ないからである。

4月26日

神のみこころを安全に、しかもそれのみを行おうと一たん決心したならば、まず、たえまなく働き、人間にゆるされたすべての手段をそのために忠実に用い、そしていたずらに心配をしてはならない。なぜなら、上から与えられる真の知恵は、それを実際に用いないうちは、つまり、なにもせずに保存するためには、決して授けられないからである。また一般にわれわれは、それ以前には、その知恵を正しく理解しうるような心の準備が全くできていないからであるもある。けれども、この知恵は、われわれがまじめにそれを求め、またつかまえようと用意しているならば、まったく確実に、時をあやまたず、与えられるものである。われわれはつねに注意深くありさえすればよい。つかのまの享樂に惰眠をむさぼったり、休養ばかりを望んだり、といてやたらにあせったりしてもいけない。なぜなら、神の道を進むには、つねに元気ではつらつとして働かなければならないが、あくせく働く必要はないからである。

次に、われわれは、正しいことを行うために、あらゆる機会を注意ぶかく見のがさず、また不慮の出来事に会って驚いたり、落ち着きを失ったりしないように心がけねばならない。そしてなによりも、口数を控えねばならない。とかくよけいな口をきくことが、厄介な状況にまき込まれる元となるものだ。しかし同時に、将来の仕事をメモにとり、仮に書きとめて早めに準備するのも、たいへん結構である。しかし本当にそれを確定するのは、その下書きを用いる間際に行わるべきである。

どんな仕事でもすべて、長い間かかって回りくどい「下準備」などはせずに、即座に、元気よくとりかからねばならない。ただちに目標とする中心的な思想に向かって突進すべきである。その場合、たいてい、重要な思想は、きわめて数少ないものである。そうすれば、付随的な思想は、仕事をすすめる間に、おのずからそれにつけ

加わって思い浮かぶものである。



4月27日

もはやいかなる享樂をも求めないということが、どんなに人生の楽しみであるかを、人びとがみずからためすまでもなく信ずることができたならば、だれもみなこのような生活法にきりかえ、この世は一挙に改まるに違いない。

人生の重大な分かれ目においては、常にまず敢行することが大切である。そうすれば、おのずから力が生じ、最後に、その行為が正しかったという洞察が与えられる。

### 新しい国

旅路はおわり、この決行によって  
暗い潮路に橋渡しされた。

霊の船に乗って、わたしは無事に  
新しい国まで運ばれた。

それはふしぎな国、別の星、  
地上の樂園とも呼ばれよう。

きわめて近いが、きわめて遠く、  
この国を知るものは少ない。

かつての地上生活の重荷は、  
はるかかなたに置いてきた。

己を棄てるのが、ここでは「幸福」と呼ばれ、  
生とは「神の栄光のための存在」と呼ばれる。

...

ああ、もはやこの地を離れてはならぬ。

ここでおまえは完全にいやされよう。

これまで光となって導いた聖なる者の  
歩いた足跡がはつきり目の前に見える。

あさごとに新しい諦念による

新たな勝利をよるこぶがよい。

いまや苦しいときはすぎ去った。

闇は消えさり、夜明けに向う。

4月28日

実践的に言えば、人生の主要事は、つねに自分の義務を行い、これに反する心の傾向や異論をあまり気にすまいと、断固たる決意を抱くことである。なおその次に、これを実行しうるためには神を信じ、神とつねに結ばれていなければならぬという信念が加われば、事はすでに成ったのであり、心は堅固になり、真直ぐな道が開けてくる。だが、この二つの条件がそなわっていない限り、宗教や道徳についてどんなに仰々しく語っても、それは単なる饒舌（じょうぜつ）に過ぎない。

4月30日

古代の知恵の最も美しい表現は、ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの有名な日記の1節に含まれている(この日記は、皇帝が急死した際に、その長袍(トーガ)の中から発見されたと伝えられている)、「たえず何かしら人びとの役に立つものになれ。そしてこのような普段の鷹揚さをおまえの唯一の楽しみとせよ。しかも、時おり神性へ一瞥をささげる義務があることを忘れるな。」

最高の地位にある人が、もっぱら哲学的見地から、これにまさることをいい、かつ実行した例は、かつてなかったであろう。フリードリッヒ大王あたりが、わずかにこれと比較されうる唯一の人物であるかもしれない。

けれども、このような「神性」を心に抱く生活、もしかしたら全く神性などとかかわりない生活は、なんと貧しいものであろう。

## 5月5日

私はあわれみの綱、すなわち愛のひもで彼らを導いた。私は彼らに対しては、あごから、くびきをはずす者のようになり、かがんで彼らに食物を与えた。(ホセヤ 11・4)

「良い計画でも破滅への道が敷かれている」という格言は、大体においてたしかに適切な言葉である。だが、それはなぜであろうか。それは、単に人間が移り気なためや、われわれを四方から取り巻く反対勢力のためばかりではなく、実にしばしばわれわれの良い計画そのものが実際上遂行できないものであり、われわれの力や時間や外的事情に適しないものだからでもある。

神の「導き」においては、事情は全く異なる。この場合には、その人がなしえないこと、時期に合わないこと、あるいはそれをなす力がまだ与えられないことは、何一つ要求されない。

あなたが神の導きに身をゆだねるならば、色々と「計画」を立てることをさし控えるが良い。あなたを前進させるすべてのものが、きわめて明白な要求、あるいは機会をいう形をとって、つぎつぎに、しかも正しい順序で、あなたを訪れてくるのである。これを、イスラエルのある預言者はいみじくも「愛のひもに導かれる」(ホセヤ書 11 の 4)と呼んだ。すなわち、幼児が手引きひもで歩かせられるように、導かれるのである。これは、人間の計画よりもはるかに勝っている。

ホセヤ書 11 の 4、ルカによる福音書 1 の 6・78・79、ヨハネによる福音書 1 の 51、3 の 27